

## *Troilus and Cressida* における リビドー経済<sup>1</sup>

八 鳥 吉 明

*Troilus and Cressida* を特徴付けているのは二つの主題である。一つは劇の題名に明示されているように Troilus と Cressida の関係を巡って展開される「性愛」の主題であり、もう一つは Troilus と Cressida の関係の文脈を構成するトロイ戦争を通じて展開される「戦争」の主題である。しかし性愛と戦争が問題となるのは何も Troilus と Cressida の場合に限ったことではない。性愛と戦争は劇全体を貫く二つの特権的主题として劇の様々な状況で様々なかたちで問題化する。例えばこの劇における狂言使いである Thersites は次のように言っている。“All the argument is a whore and a cuckold: a good quarrel to draw emulous factions, and bleed to death upon. Now the dry serpigo on the subject, and war and lechery confound all!” (2. 3. 74-77: 強調筆者, 以下同様)<sup>2</sup> 秩序と命という犠牲を賭してまで闘われるトロイ戦争の原因, それはトロイの将軍 Paris がギリシアの将軍 Menelaus の妻 Helen を奪ったことに過ぎない。つまり厳かな戦争行為の根柢に見い出されるのは猥褻な剥き出しの性欲であるということ Thersites は痛烈に皮肉っている。後に Thersites はこれをより凝縮して次のように言う。“Lechery, lechery, still wars and lechery! Nothing else holds fashion.” (5. 2. 193-94) これは Thersites が Troilus に対する Cressida の「裏切り」を眼にしたときの言葉で、劇世界では性欲-性愛と戦争の二つ以外何も流行らないと彼は言っている。

このように性愛と戦争は密接に関連しており不可分な関係にあるが、一方で両者は決して同時に追求・成就することが出来ないという意味で両立不可能な関係にあることもまた事実である。そのことは例えば Troilus と Cressida の関係がトロイ戦争という現実に向かい合わざるを得なくなったときに破綻を迎えるとい

うこの劇の基本的な筋の展開に端的に現れている。またトロイ・ギリシア両共同体は戦争の障碍となるような性愛を抑圧・禁止する。つまり性愛と戦争は対立するのである。

性愛と戦争は強く繋がり合いながらも対立する。この矛盾をどう考えたらいいか。この問いに対する答えは先程引用した Thersites の言葉に暗示されている。つまりこの劇では性愛の抑圧・禁止がつねにすでに戦争をもたらすのである。ギリシアの Menelaus がトロイの Paris によって妻 Helen を奪われたことがトロイ戦争の引き金となったことはその一例である。しかも Paris のこの行為は過去にギリシア側によってトロイの女性 Hesione (Paris の叔母) が奪われたことに起因している (2. 2. 78-81)。そして同じことは後にみるように Troilus やギリシアの将軍 Achilles の事例についても言える。

性愛の存在とその抑圧・禁止による戦争の発生。しかもこの戦争は性愛への欲望によって導かれるという循環を忘れてはならない。性愛と戦争という公式的には対立する排他的な両者の共犯関係が露になるのはこの独特な循環構造においてである。以上がこの劇から抽出出来る基本的な構図である。

ここで「血」“blood” の概念を導入することで性愛と戦争の繋がりをより微視的に捉えることが出来るように思われる。例えば三幕二場で Paris と Pandarus は次のような会話を交わす。

*Paris.* He eats nothing but doves, love, and that breeds hot blood, and hot blood begets hot thoughts, and hot thoughts beget hot deeds, and hot deeds is love.

*Pandarus.* Is this the generation of love? Hot blood, hot thoughts, and hot deeds? (3. 1. 123-28)

「血」が「愛」を生む、それが「愛の系譜」である。Catherine Belsey は「欲望の過剰」“desire's excess”に関する議論の中で、ルネッサンスの医学理論では欲望とは体液の不均衡の結果生じるものであり、過剰な血は精液の起源として快楽への強迫観念をもたらし、仮に欲望が満たされないと恋煩い (lovesickness) や淫乱症 (erotomania) を引き起こすと述べている (93)。まさに血が愛を生むの

である。またこの劇における血の表象にはもう一つ別の類型がある。この劇の「序詞役」The Prologue は次のように言う。

From Isles of Greece

The princes orgulous, their high *blood* chaf'd,  
 Have to the port of Athens sent their ships  
 Fraught with the ministers and instruments  
 Of cruel *war*. (1-5)

ここでは「血」が「戦争」を生む。そして基本的にこの劇では欲望の充足が得られないことから戦争が起こる。つまり血の抑圧は戦争をもたらすのである。これがこの劇における「血液経済」である。

性愛と戦争両方を生み出すこの「血」の概念を Sigmund Freud の言う「リビドー (libido)」の概念との類似において抽象化・一般化することも出来よう。リビドーとは「性の力学的現れ」“the dynamic manifestation of sexuality” (“Libido Theory” 255)を示すために Freud が仮定したエネルギー、一言で言えば「性のエネルギー」“sexual energy” (“On Narcissism” 71) である。そしてこのエネルギーは対象 (object) との関連、目標 (aim) との関連、性的興奮の源泉との関連における性の欲動の様々な変容の根柢に存在するものである (Laplanche and Pontalis 239)。その意味でリビドーとはその対象と充足の様式を変化させることが出来る可塑的なものであり (Laplanche and Pontalis 319)、またそれは量的な概念でもある。先程指摘した劇における「血液経済」を「リビドー経済」の用語で再記述すると次のようになる——性愛において性対象に向けられたリビドーが抑圧されると、それは性的な目的から逸らされ、最終的には戦争を導く攻撃的エネルギーに転換・昇華されていく。劇世界ではリビドーが戦争のためのエネルギーに転換されることが「昇華 (sublimation)」である。

本論は *Troilus and Cressida* における性愛と戦争の関係を「リビドー経済」の観点から分析することを目的としている。性愛から戦争へと至るプロセスを促進する性愛の抑圧・禁止によって登場人物に様々な倒錯的行動が現れる。また性愛の抑圧・禁止が最終的に戦争をもたらすとすれば、戦争自体が一つの倒錯行為で

もある。本論ではこの倒錯を Freud が「前性器体制 (pregenital organizations)」と呼ぶ三段階に従って分けする。前性器体制とは性器優位体制が形成される前のリビドーの発達段階——性器領域が支配的な役割を担う前の性生活の体制——で第一段階の「口唇期 (oral stage)」、第二段階の「肛門期 (anal stage)」、第三段階の「男根期 (phallic stage)」の三段階から成る (“Three Essays” 116-17, 158: “Transformations” 295)。劇中人物の倒錯をこの連続する三段階に分けて考察することで、性愛から性愛の抑圧・禁止を経て戦争へと至るプロセスを特別なたちで明らかにすることが出来るように思われる。そこでこのプロセスの典型であるギリシアの Achilles とトロイの Troilus を以下それぞれ具体的に論じていく。

## I

Achilles を通じてギリシアにおける性愛と戦争の対立、並びに性愛の抑圧・禁止とそれによるリビドーの転換・昇華のプロセス、つまり性愛から戦争へと至るプロセスを考察することが出来る。

Achilles は密かに敵トロイの王 Priam の娘 Polyxena と交際しており、それが彼のトロイ戦争への参戦を名目上制止している。Achilles にとって性愛と戦争とは決して両立することはない。

Achilles がトロイ戦争の勝利に不可欠な存在であることに自覚的なギリシア陣営の将軍達はそれ故 Achilles の性愛を禁止・抑圧しようとする。三幕三場でギリシアの将軍 Ulysses は戦場から離れ自分のテントに引き籠もった Achilles を諷める。Ulysses は Achilles の「隠遁」“privacy” (3. 3. 190) が彼の「愛」“love” (3. 3. 193) に起因することを指摘するが、Ulysses はそうした Achilles の性愛に対して「英雄的」“heroical” (3. 3. 192) であること、つまり戦争の論理が優位にあることを説く。最終的に Ulysses はトロイの将軍 Hector から申し出のあった一騎打ちを受諾するよう Achilles に求めて次のように言う。“[B]etter would it fit Achilles much / To throw down Hector than Polyxena.” (3. 3. 206-07) Ulysses は性愛と戦争とを比較し対立させ、その優劣を明確にして Achilles を戦

場へ向かわせようとしている。“throw down” という言葉には戦闘行為の意味と同時に性的な意味がある。この言葉の両義性が暗示するのは性愛と戦争が実は同じエネルギー（リビドー）から派生することであると思われるが、問題はこの二つが区別され、性愛が抑圧されることにある。Ulysses の発言を受けて Patroclus は次のように言う。“A woman impudent and mannish grown / Is not more loath'd than an *effeminate* man / In time of action.” (3. 3. 216-17) 戦争で戦わない男性は去勢された存在として女性化し、貶められる。ここでは性愛と戦争の対立がジェンダー化されて女性性と男性性の対立として語られている。逆に言えば、両性の対立とは性愛と戦争の対立により構成される。

しかし注意すべきなのは、Achilles と Polyxena の二人は現在戦争により隔てられており直接的な関係を一切持たないということである。その意味で Achilles の性愛は抑圧されている。そのとき不在の Polyxena の代理として抑圧された Achilles のリビドーが向かう対象は Patroclus である。Patroclus は先の発言の中で次のように言っている。“They think my little stomach to the war / And *your great love* to me restrains you thus.” (3. 3. 219-20) 後に Thersites は Patroclus のことを “male varlet” (5. 1. 14), さらに「男娼」 “masculine whore” (5. 1. 16) と呼ぶが、基本的にこれらの言葉は Achilles と Patroclus の間に同性愛的関係があることを暗示している。

Achilles の同性愛的傾向は敵トロイの将軍 Hector にも向かうが、その表現はより倒錯的なものとなる。三幕三場で Ulysses の諫言を受け自らの “privacy” を一旦は破る決心をした Achilles はトロイの将軍達をギリシアに迎えることを提案する中で Hector に対する欲望を次のように表現する。

I have a woman's longing,  
An *appetite* that I am sick withal,  
To *see* great Hector in his weeds of peace,  
To talk with him, and to *behold* his visage  
Even to my full of *view*. (3. 3. 236-40)

女性化した Achilles は武装を解いた——“unarm'd” (3. 3. 236) ——姿の Hector を「見る」ことへの欲望を語る。注目すべきは、Achilles が自らの欲望を語るのに“appetite”というもともと「食欲」を意味する言葉を使っていることと彼の欲望の主たる目的が Hector を「見る」ことにあるということである。

四幕五場でギリシア陣営は Hector を迎えての宴会——Hector はそれを“this loving interview” (4. 5. 154) と呼ぶ——を実現させる。この男達の「愛」の宴会では「食欲」と「視線」は並列的に語られる。Hector 自身 Ajax に次のように言う。“I will go *eat* with thee, and *see* your knights.” (4. 5. 157) Hector を誘う Ulysses も同じである。“After the general, I beseech you next / To *feast* with me, and *see* me at my tent.” (4. 5. 227-28) 「食べること」と「見ること」は欲望の次元で不可分の関係にある。

Achilles も Hector を自らのテントに招こうとし、Diomedes がその旨を Hector に伝える。“[G]reat Achilles / Doth long to *see* unarm'd the valiant Hector.” (4. 5. 151-52) 性対象の衣服を剥ぐように Achilles の視線は Hector を“unarm”して「見る」ことを欲望する。ついに Hector を眼前にしたとき Achilles は次のように言う。“Now, Hector, I have *fed* mine eyes on thee; / I have with exact view perus'd thee, Hector, / And quoted joint by joint.” (4. 5. 230-32) ここでの Achilles の眼は「食べる」眼である。つまり Hector を前にした Achilles のエロティックな視線は「食人的 (cannibalistic)」でもある。Arden 版や New Penguin 版の編者は Achilles の“joint”という言葉が「屠殺 (butchery)」の意味を暗示していることを指摘することで、この場面が孕む残忍性の雰囲気伝えていているが、これは Achilles の言葉が有するサディズムへの指向性を裏付けている。窃視症が同時に露出症を含むように、Achilles は自らの身体を Hector に「見せる」——“Behold thy fill” (4. 5. 235) ——が、それは「見せる」ことの返礼として再び Hector を「見る」ことを求めるためであるように思われる。“I will the second time, / As I would buy thee, *view* thee limb by limb.” (4. 5. 236-37) ここで Hector の身体は肉=商品として対象化される。Hector はこうした Achilles の眼が有する暴力性に気付いている。“Why dost thou so *oppress* me with thine eyes?” (4. 5. 240)

Achilles の Hector に対する態度は愛と憎しみを含むという意味で「両価的 (ambivalent)」である。つまり Achilles のリビドーと攻撃性は Hector という同一対象に同時に向けられている。Achilles は Hector の見かけの背後にある何か過剰な力——Hector 自身それを“more” (4. 5. 239) と呼ぶ——の源泉を探し当て、破壊“destroy” (4. 5. 242) しようとするが、結局見出すことは出来ない。それが彼の Hector に対する羨望と破壊の衝動 (4. 5. 241-45) とをもたらしめているように見える。その場での二人の関係は一気に緊張度を増していく (4. 5. 246-59)。

このようにギリシアにおける性愛の禁止・抑圧は Achilles の同性愛と連動するようなかたちで示され、彼のいわゆる退行的で倒錯的な行動とも関連付けて示されているように思われる。その中で Achilles の視線は性的意味合いを強く帯びようになり、彼の眼は「性感帯 (erotogenic zone)」となっている。この視線と重なり合うように密着して存在するのが食欲である。その場合には口唇領域が性感帯となるべきところであるが、その性的満足は眼に「委託 (anaclisis)」されている。そして彼の性欲動は対象破壊というサディスティックな方向も取るという点で両価的なものである。Freud 的精神分析の観点に立てば、Achilles のこうした特徴は「口唇期 (oral stage)」, 特に「口唇サディズム期 (oral-sadistic stage)」にみられる特徴と交錯していると言えよう。口唇期はリビドー発達の第一段階で、そこでは性的満足(「口唇性欲 (oral erotism)」)は主として食物摂取にともなう口唇の興奮に結び付いており、性的目標は性的対象の「体内化 (incorporation)」であるとされるが、体内化というこの口唇の活動はさらに視覚にも置き換えられ得る。<sup>3</sup>そして口唇サディズム期ではリビドーと攻撃性が同一の対象に向けられるという両価性が認められるのである (“Three Essays” 116-17, 158: Laplanche and Pontalis 287-89)。こうしたことはまさに Achilles の抑圧された性欲の表現としての視線と食欲の状況を説明する。

以上を Achilles にみられる倒錯の第一段階とすると第二段階はどのようなものか。

先程みた Hector との挑発的な対面で Achilles は彼との対決を一旦は決意するが (4. 5. 265-69), Polyxena の存在が再びそれを阻止する (5. 1. 36-43)。結局 Achilles を最終的に戦争に向かわせるのは「愛人」Patroclus の死と部下 Myrmidon

達の屈辱的な負傷である。Ulysses はその様子を次のように語る。“Patroclus’ wounds have rous’d his drowsy blood.” (5. 5. 32) この「血」は欲情ではなく怒りを意味する。Patroclus の死により Achilles のリビドーは充足の現実的・実際の対象を失うことで、初めて戦闘に充当される攻撃的エネルギーへと転換・昇華されていく。またもともと Hector は Achilles にとって羨望の対象であると同時に破壊欲動の対象であったが、この両価性は攻撃性に統一されていく。こうして Achilles は Patroclus の死によってもたらされた損失感の清算を求めるように Hector の死だけを求める「欲動 (drive)」の存在と化す。「欲動」とは Lacan 派の精神分析理論家 Slavoy Žižek によれば次のようなものである。“A drive is precisely a demand that is not caught up in the dialectic of desire. . . . Drive . . . persists in a certain demand.” (21) Achilles の「要求 (demand)」は Hector である。“I will none but Hector.” (5. 5. 47) Achilles は Hector の破壊、つまり死と彼の所有・支配を要求し、実現する。Achilles の攻撃と所有・支配への欲動が最終的に取る形態が Hector の死体を自分の馬の尾にしぼり、引き摺り廻すことである (5. 8. 21-22)。

精神分析的観点から Achilles のこの欲動を「肛門期 (anal stage)」, 特に「肛門サディズム期 (anal-sadistic stage)」の特徴と関連付けて考えることが出来る。これはリビドー発達第二段階で肛門を性感帯として性的満足 (「肛門性愛 (anal erotism)」) が得られる。肛門性愛と繋がる排便作用は肛門括約筋の働きに応じて排泄と貯溜という二つのかたちを取るが、それらがサディスティックな対象破壊への欲動とともに対象の所有・支配への欲動に結びついている (“Three Essays” 117, 158: “Transformations” 295: Laplanche and Pontalis 35-36)。このサディズムの存在が Achilles の行動を特徴付ける要素と肛門期に関して指摘される特徴的要素との関係を共約可能なものにする。

以上を Achilles の倒錯第二段階とすると第三段階はこれとほぼ同時に始まっている。今の彼は去勢され、女性化された (effeminate) 存在ではなく、「刀」 “sword” を持ち戦う兵士=男である。刀を持つ者が男性で刀を持たぬ者が女性であるような世界では刀は「男根 (phallus)」の象徴である。そして精神的に言えば、この Achilles は「男根期 (phallic stage)」にいる。これはリビドー



発達の第三段階で「部分欲動 (component drives)」が性器優位の下に統合される。しかし成人の最終的な性器体制とは異なり、この段階では唯一の性器つまり男性性器だけが重要で、男根が優位にある。そして男根を持つ者と去勢されている者の対立が両性の対立を形成する (“Three Essays” 118-19, 158: “Infantile Genital Organization”: Laplanche and Pontalis 309-11)。Achilles について言えば、部分欲動が男根の下に統合されるように、彼の錯乱するリビドーは刀の下に攻撃的エネルギーとして転換・昇華され、集約されていく。最後の台詞の中で Achilles は次のように言う。“My half-supp’d sword, that frankly would have fed, / Pleas’d with this dainty bait, thus goes to bed.” (5.8. 19-20) 「刀」－男根が経験する「充足」とその後の「眠り」、そしてこの刀にはかつて彼の眼が持っていた口唇期的サディズム－カニバリズムへの衝動が引き継がれてもいる。

以上が Achilles における性愛の抑圧・禁止が最終的に彼を戦争へと導いていく際にみられる倒錯のプロセスである。

## II

トロイにおいても性愛と戦争は対立する。そのことを範例的に体现している人物は Troilus であり、この劇は Troilus が性愛と戦争が両立不可能な対立項であると規定する次のような言葉で幕を開ける。“Call here my varlet, I’ll unarm again. / Why should I war *without* the walls of Troy, / That find such cruel battle here *within*?” (1. 1. 1-3) “unarm” という言葉は攻撃エネルギーに転換・昇華された Troilus のリビドーを再リビドー化することを暗示する。そしてそれは対象リビドーとして Cressida に向かう。しかし Cressida に向かう Troilus のリビドーは充足の機会を遅延され、その後一時的に充足を経験するものの最終的には抑圧される。それが Troilus に Achilles と同様の倒錯のプロセスをもたらす。

そもそも Troilus の Cressida に対する関係は初めから「食」のイメージ——“a cake-making imagery”——を通して示されていることは注目に値する。冒頭の Troilus と Pandarus の対話がそれである (1. 1. 14-26)。Beryl Rowland はこの “a cake-making imagery” の持つ意味をその古層に溯って分析し、本来 “the

mill”に関連する全てのプロセスが性的関係を表現するのに役立っていたこと、そしてこの“a cake-making imagery”は性交・懐妊・妊娠・出産という一連のプロセスを記述していることを指摘している。そしてこのイメージは「食事としての愛の観念」“the idea of love as a meal”を強調し、Troilusの愛が結局「食欲」に過ぎないことを示すと論じている。つまりTroilusにおいて性欲は食欲に他ならないものとして表現されているのである。

またCaroline F. E. Spurgeonはこの劇において食欲や食べ物・味覚・料理のイメージが支配的な象徴を構成していることを指摘しているが(320-24)、それはTroilusが性対象としての女性を語るときに顕著である。二幕二場でHelenのギリシアへの返還に反対する意見を述べるとき、性対象としての女性に対して“distaste”(2.2.67)、さらには“the remainder viands”(2.2.71)という表現を用いたTroilusは五幕二場でCressidaの「裏切り」を目にして“The fractions of her faith, orts of her love, / The fragments, scraps, the bits, and greasy relics / Of her o'er-eaten faith”(5.2.157-59)と語る。(ちなみに嫌悪感を内包する前者の例にわずかながら含まれているサディズムの要素は断片化された食べ物のイメージを利用した後者の例で強調されている。)Troilusにとって愛とは食べるもの、食の対象なのである。

口唇領域での性的満足としてより一般的なのは「くちづけ」“kiss”であるが、くちづけはTroilusのCressidaに対する特徴的な性表現となっている。TroilusとCressidaが初めて出会ったときのくちづけを描写するPandarusの言葉“a kiss in fee-farm”(3.2.49-50)はそのことをよく示している。こうしたTroilusは口唇期の特徴を備えている。

結局TroilusはCressidaとの性的関係を成就することに成功する(同時に幻滅も体験する)が、その直後トロイ・ギリシア両共同体の決定によりCressidaとAntenorとの交換が行われることになる。TroilusはCressidaとの直接的な性的関係を断たれ、CressidaはギリシアのDiomedesの手に渡る。この社会的圧力を伴う外的条件が彼のリビドー充足の途に重大な障碍をもたらす。そのとき彼の倒錯が顕著となる。今では彼はCressidaを「見る」、正確には「覗く」ことしか出来ないから、彼は眼を性感帯として性的満足を眼に依存・依託するほかない。

ギリシア陣営を訪れた Troilus は Cressida を「覗く」ことが出来る場所に自分を案内してくれるよう Ulysses に頼むが、それは Ulysses が Diomedes の猥褻な視線 “amorous view” (4. 5. 281) を語る (4. 5. 280-82) 直後である。Diomedes の “amorous view” は Troilus に「転移 (transference)」する<sup>4</sup>。

口唇領域 (食欲) から眼 (視線) へと性感帯 (性的満足の場所) を変化させる Troilus は口唇期の特徴を備えている。そしてある意味で性的不能と呼び得る Troilus の現在の状態が彼を窃視症とする。以上が倒錯の第一段階である。

Cressida を覗く Troilus は彼女の「裏切り」を眼にしてしまう。ここで倒錯の新たな段階が始まるが、Troilus において倒錯の第二段階 (肛門期) と第三段階 (男根期) は同時に進行する。換言すれば、「サディズム」と「刀」は分かち難く結び付いているが (5. 2. 166-75), 以下では敢えてそれらを個別的にみることでそれぞれの具体的状況を確認したい。

Cressida を Diomedes に奪われた Troilus は倒錯の第二段階 (肛門期) に特徴的なサディズム、つまり攻撃・破壊と支配・所有への欲動を示す。“Hark, Greek: as much as I do Cressid *love*, / So much by weight *hate* I her Diomed. / That sleeve is *mine* that he'll bear on his helm.” (5. 2. 166-68) Troilus が主張するのは自分の「愛」が「憎しみ」という攻撃性に变化したということと Cressida と彼女に贈った “sleeve” が本来「自分のもの」であるということであり、このように彼において支配・所有への欲動と攻撃・破壊への欲動は繋がっている。今や Troilus は Diomedes に対する復讐を要求する欲動の存在と化す。“Fly not, for shouldst thou take the river Styx / I would swim after.” (5. 4. 19-20) Troilus を阻むものは「死」“my ruin” (5. 3. 58) 以外何もない。彼の攻撃欲動は「死の欲動 (death drives)」と通底している。見方を変えれば、もともと Troilus の Cressida への欲望には「死」の要素 (死の欲動) が含まれており (3. 2. 18-23), それが今外部に向けられることで破壊と攻撃への衝動として表現されると言える。

兄 Hector の死という事態の後でも、Troilus に変化はない。Cressida を奪われ、Hector を虐殺された Troilus の損失感覚とこの損失に対する具体的あるいは象徴的な精算の希求が彼の攻撃欲動をむしろ強化する。Troilus は自らの破滅

“our sure destructions” (5. 10. 9) について語りながら (5. 10. 6-9), あたかもギリシアに対する貸しの返済を求めるように, あるいは借りを返済するように, 攻撃と破壊を目標とする行為にあくまで忠実であり続ける。Troilus は最後に攻撃と破壊への意志を改めて語る (5. 10. 21-31)。ギリシア軍に対しては “I’ll *through and through* you!” (5. 10. 26) と言い, Achilles に対しては “I’ll *haunt* thee like a wicked conscience still, / That mouldeth goblins swift as frenzy’s thoughts.” (5. 10. 28-29) と言う Troilus の言葉に表現されているのは彼の欲動の徹底性である。彼の最後の言葉は “With comfort go: / Hope of revenge shall hide our inward woe.” (5. 10. 30-31) というものだが, ここに示されているのは悲哀という「内向的」エネルギーを「復讐」という外向的・攻撃的エネルギーに置換し, そこに「満足」を見い出そうとする Troilus の態度である。サディズムの快楽——Troilus は肛門期の特徴を体現している。

先程述べたように, 倒錯の第二段階は第三段階と平行する。Troilus のサディズムは戦場の「刀」と結び付く。愛の憎しみへの変化 (5. 2. 166-67) を述べた直後, Troilus は次のように言う。“My *sword* should bite it [Achilles’s helm].” (5. 2. 170) この「刀」“my prompted sword” (5. 2. 174) が彼を戦場に駆り立てる。Hector でさえこうした Troilus を “Unarm” (5. 3. 35) することが出来ない。Troilus はむしろ次のように言う。“[W]hen we have our *armours* bucked on / The venom’d vengeance ride upon our *swords*.” (5. 3. 46-47) 彼を今特徴付けるのは “armours” という言葉であって, かつてのように “amorous” という言葉ではない。そして「復讐」というサディスティックな攻撃的エネルギーが「刀」から放出される。こうして性対象から強制的に排除された Troilus のリビドーは戦争を導く攻撃的エネルギーへと転換・昇華され, 刀一男根から集約的に放出一射精される。

ギリシア共同体と同様トロイ共同体ではもともと戦争の障碍となる性愛は基本的に抑圧・禁止されていた。この抑圧・禁止を内面化しているからこそ Troilus は Cressida との関係を優先させ戦場で戦わない自分のことを去勢され, 女性化された存在と見做していた。戦場に出なかったことを Aeneas に問われた Troilus の返答には次のような言葉がある。“This *woman’s* answer sorts, / For *womanish*

it is to be from thence.” (1. 1. 106-07) 劇冒頭では女性・処女・幼児に劣ると自己規定していた (1. 1. 9-12) Troilus がしかし五幕三場では次のように言う。“Let’s leave the hermit pity with our mother.” (5. 3. 45) 今では彼は去勢された存在ではなく、「刀」“swords” (5. 3. 47) —「男根」を持った兵士=男となるのである。

以上が Troilus の中で生じていた性愛と戦争の対立が性愛の抑圧から最終的に戦争に統合されていく際に彼にみられる倒錯のプロセスである。

このように *Troilus and Cressida* において性愛がその抑圧・禁止を経て戦争へと至るプロセスは倒錯の三段階——口唇期・肛門期・男根期——を発現させる。そして特に肛門期のサディズムと男根期の男根一刀中心主義が戦争を中心的に構成し、また戦争の男性中心主義を支える。戦争の倒錯性とはこのことであり、それは不断に再生産されることが求められる。その中でリビドーは戦争を導く攻撃的エネルギーに転換・昇華される。これがこの劇のリビドー経済の基本的な構造である。

## 註

- 1 本論は予定されている *Troilus and Cressida* 論の導入部を成すものである。
- 2 *Troilus and Cressida* からの引用は全て Arden 版に拠る。
- 3 「見ること」“looking” とリビドーの結び付き、あるいは眼が性感帯の役割を果たすこと等を Freud 自身しばしば指摘しているが (“Three Essays” 61-62, 69-70, 84, 120, 130), 口唇期に視覚そのものを含めてはいない。この両者の関係性については Laplanche and Pontalis に拠る。“Psycho-analysis reveals that in childhood phantasies this mode [a relational mode: incorporation] is not attached solely to oral activity but that it may be transposed on to other functions (e. g. respiration, sight).” (288)
- 4 Troilus と共に Cressida を「覗く」Ulysses に関しても Troilus と同様の症候——窃視症——を指摘できる。

## 引用文献

- Belsey, Catherine. "Desire's Excess and the English Renaissance Theatre: *Edward II, Troilus and Cressida, Othello*." *Erotic Politics: Desire on the Renaissance Stage*. Ed. Susan Zimmerman. London: Routledge, 1992. 84-102.
- Freud, Sigmund. "The Libido Theory." *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*. Ed. and trans. James Strachey. Vol. 18. 1955 London: Hogarth, 1981. 255-59.
- . "On Narcissism: An Introduction" *On Metapsychology: The Theory of Psychoanalysis*. The Penguin Freud Library, vol. 2. Ed. and trans. James Strachey. 1984. London: Penguin, 1991. 65-97.
- . "Three Essays on the Theory of Sexuality." *On Sexuality*. The Penguin Freud Library, vol. 7. Ed. and trans. James Strachey. 1977. London: Penguin, 1991. 39-169.
- . "On Transformations of Instinct as Exemplified in Anal Erotism." The Penguin Freud Library, vol. 7. Ed. and trans. James Strachey. 1977. London: Penguin, 1991. 295-302.
- . "The Infantile Genital Organization (An Interpolation into the Theory of Sexuality)." The Penguin Freud Library, vol. 7. Ed. and trans. James Strachey. 1977. London: Penguin, 1991. 307-12.
- Laplanche, J., and J.-B. Pontalis. *The Language of Psycho-Analysis*. Introd. Daniel Lagache. Trans. Donald Nicholson-Smith. The International Psychoanalytical Library. London: Hogarth, 1973.
- Rowland, Beryl. "A Cake-Making Image in *Troilus and Cressida*." *Shakespeare Quarterly* 21 (1970): 191-94.
- Shakespeare, William. *Troilus and Cressida*. Ed. Kenneth Palmer. The Arden Shakespeare. 1982. London: Routledge, 1994.
- . *Troilus and Cressida*. Ed. R. A. Foakes. New Penguin Shakespeare. Harmondsworth: Penguin, 1987.
- Spurgeon, Caroline F. E. *Shakespeare's Imagery and What It Tells Us*. London: Cambridge, 1952.
- Žižek, Slavoj. *Looking Awry: An Introduction to Jacques Lacan through Popular Culture*. October Bk. Ser. Cambridge: MIT P, 1991.